

タイトル	物語理解に含まれる一般的言語的コミュニケーションの原型について()
著者	小島, 康次; KOJIMA, Yasuji
引用	北海学園大学学園論集(158): 27-37
発行日	2013-12-25

物語理解に含まれる一般的言語的 コミュニケーションの原型について (IX)

小 島 康 次

9. 記号としての言語とコミュニケーション

9. 1 記号とは何か

9. 1. 1 記号論の創始者—ソシュール

言語を理論的に見る視点を最初に示した理論家としてソシュール (Saussure, F.) の名を挙げることに異論はないであろう。しかし、ソシュールが言語を対象とする学問に取り組んだのは、言語学が記号 (学) 論の主要な部門であって、記号 (学) 論上の問題を明らかにするには言語の研究が最も適切と考えたためであった (Saussure, 1974)。それは、言語学が他の記号システムよりも形式的に洗練された分野だったことが理由であり、記号論はその後にも言語学の概念に大きく依存することになる。

記号論とは何か。記号 (学) 論は独立した学術分野というより、哲学、文学、人類学、芸術など、複数の領域をカバーする一種のメタ理論であると見ることができる。したがって記号 (学) 論が実際にカバーする領域については記号論者を任ずる人々の間でも意見が分かれている。もっとも広く取れば、人間をあらゆるものに意味を帰属させる存在として定義することにより、記号の生成と理解を通して意味を作り出す活動すべてを対象としているということになる。イメージ、言葉、身体動作、音声、匂い、味、といったものは本来、意味を有しているものではなく、それらが記号として理解されてはじめて意味が立ち上がるのである。それはどのようにして可能なか。

ソシュールがまず取り組んだ問題は、言葉はなぜ通じるのかという原理的なものだった。記号論を展開するに際し、ソシュールは記号表現 (媒体=シニフィアン) と記号内容 (意味=シニフィエ) を区別する。意味を担う記号表現と担われる記号内容との関係が「ラング」と呼ばれる規則体系に依存するのに対して、「パロール」は個別具体的な使用というレベルでとらえられる何かだとされる。このラングとパロールを合わせた個別言語の全体像がランゲージュとなる。ラングは飽くまで抽象的な性質をもつものであり、具体的に現れ出てくる要素はパロールであるが、ソシュールが対象としたのは規則の束であるラングの方だった。ラングを構成する単位は単語である。止め処ない音声であるパロールを音素 (「聴覚映像」と呼ばれる) に切り分け、概念 (語義)

と対応させる最小単位が単語だからである。意味を構成するもっとも重要な要素であるはずの「文」は、自由度が高くその時々で多様な現れ方をすることからパロールの問題とされ、ラングの単位とは認められなかった。

しかし、記号表現と記号内容の区別は飽くまで分析的目的のための方便であって、実質的な区別を表すものではないとされる。例えば、話し言葉で、意味をもたない音声（これは言葉ではない）や、音声をもたない意味などは想像することすらできないように、記号表現と記号内容とは表裏一体で全体的に相互依存関係にあり、一方が他方より先に存在しているわけではない。ソシュールの後継者と目されるイエルクスレウ (Hjelmslev, L.) も記号表現と記号内容を区別はするが、よく見られる形式と内容の二元論的な区別とは異なる点を強調する。音声という表現が意味という内容を入れる容器であるかのように考えるのは間違いであり、意味は、その過程において音声（実際に発声されなくても）をとともう理解という能動的な活動を経て生じるものだという。

ソシュールは音声と思考（または記号表現と記号内容）とは紙の両面のように切り離せないことを強調し、それらは心の中で密接に結び付けられていて、各々が他のものを引き起こすのであると言う (Saussure 1983, Saussure 1974)。

9. 1. 2 ソシュールにおける「意味」と構造主義の誕生

ソシュールは、記号は秩序ある一般化された抽象的システムの一部としてのみ意味を生成すると主張した。彼の意味の概念は、指示的というより純粋に構造的、相対的である。最も優先されるのは、事物よりも関係である。記号の意味は、それまで常識的に考えられていたように、記号表現に内在する特徴や物質的事物への指示から導かれるのではなく、他の記号へのシステムの相対関係の中にこそあるとされる。

記号が実在物や本質的な性質という用語で定義されないとすれば意味とは何かが重要な問題となる。ソシュールの独創性がここにある。記号は自分自身の上に意味を生成せず、他との関係で意味を生成する。記号表現も記号内容も純粋に相対的実体であり、記号は互いを参照することによってのみ意味を生成することができる。したがって、言語システムでは全て関係に依存しているということになる (Saussure 1983, Saussure 1974)。

例えば「男」という言葉は、それが対象とする事柄の属性によって意味を持つように感じるかもしれない。しかし、その意味はその言葉と共に使われるほかの言葉との関係において、使用される文脈に依存する。

ソシュール自身が設定した言語学の基本原理は二つある。第一の原理は、「恣意性」である。先に区別した記号表現と記号内容は元々性質の異なるものであり、それらの間には何ら結びつくべき必然性がない。犬を表す日本語は「イヌ」と発音される単語であるが、英語であれば同じ犬が dog と表記され、「ドッグ」と発音される。他の言語にはまた違った表記と発音が対応し、それら

の間に関連性はない。同じ言語であっても地方によって方言があるなど変異があり、また、時代によって言葉は変化することが知られている。

また、ソシュールは一つの言語に全く同じ意味の単語はないという原則を暗にもっていたようである(町田, 2004)。完全な同義語の存在は冗長であり、無駄である。一見、同じ意味の単語を組み合わせた表現のようでも、実際に使用される際には異なる制約があり、全く同じとは言えない。「男と女」と「男性と女性」は、意味的に重なってはいても常に同じニュアンスで用いることはできないだろう。前者は生物学的な性別を基本にした広い意味の対比に用いられるのに対して、後者は文化的な性役割に纏わる性差に関する場合に多く用いられる。

一つの言語に完全な同義語がないとすればその言語がもっている単語の意味はすべて異なることになり、ある単語の意味を決定するには他のすべての単語の意味と違う点を考慮に入れなければならないことになる。つまり、ある単語の意味は他の単語の意味(ソシュールの用語では「価値」との関係によって決まるということである。

このことを一般化すると、単語の意味はその単語が属する体系内の他の記号との関係(ソシュールはこれを「連合関係」と呼ぶ)に依存し、単語はその文脈から独立した絶対的な意味を有するものではないと定式化できる(Saussure, 1974)。ある単語の意味が、その単語を要素として含む体系に属する他の単語の意味と異なるという性質に基づいて決定されることから、ソシュールは、「ラングの中には差異しかない」とさえ言明する。言語が示す体系のことを「差異の体系」と呼ぶ所以である。

単語の意味が差異の体系を考慮せずには決まらないとしても、それだけでは言葉の意味に関する原理が尽くされたとは言えない。個々の単語は、それ単独では意味が確定しないことも分かっているからである。一般に事柄を表す上での最小単位は文であるが、それはラングではなくパロールの問題として、言語学の対象から外されたはずである。ここでソシュールは少し変則的な手法を用いる。実質的に文である単語の繋がった状態を連辞と呼び、連辞の中の単語間の関係を「連辞関係」と名づけたのである。連辞においては複数の単語の語順が問題となり、そこには必ず規則がみられる。これは正に文法規則のことであり、後にソシュールが「構造」と呼び換えたように、文法構造の問題はソシュール言語学においても位置づけられていたと考えられる。そして、ここに意味と構造の問題が前景として浮き出る 20 世紀前半の思想、構造主義が誕生したのである。

9. 1. 3 パースの記号論—文化としての記号世界

パースの記号論の特徴は、「我々は、記号でのみ思考する」、「記号として理解されなければ、なにももの記号ではない」(Peirce 1931-58)という表現に現れているように、どんなものでも誰かがそれが何かを意味している、即ち、それ以外の何かを指示するか、なにかの代わりをしていると思えば記号になりうる、ということである。ソシュールの場合、記号は伝達を意図された人為

的な手段に限られるのに対して、パースでは、記号は必ずしも人間によって意図的に発せられなくてもよい。気象学的な自然の徴候も、先に挙げた身体上の医学的徴候も受け手がそれを記号として意味づけることが可能であれば、記号になり得る。われわれは、物事を「慣習という日常の体系」に関連づけることにより、ほとんど無意識のうちにあらゆることを記号として理解している。したがって、記号論の関心の中心は、日常の意味世界における記号の使用についてだということになる。

このような記号概念の拡張を可能にしたのはパースの記号に対する定義がソシュールとは大きく異なるからである。パースは記号現象を構成する要素として、「記号」、「対象」、「解釈項」の三つを指定し、これらの共同作用が記号世界を構成すると考えた。これら三つの要素のうちソシュールの定義ともっとも異なるのが「解釈項」であろう。これはいわゆる解釈者のことではない。解釈項とは、たとえ解釈者がその場にいなくても記号を記号として成り立たせることを保証する媒介的役割を果たすもの（擬似精神）である。解釈項とはある一つの対象と結びつけられる別な表象であると考えられる。

この表象を明らかにしようとするれば、別の記号でそれを名指す必要があり、それはさらにまた別の記号で名指される必要があるというように、この過程は無限に続くことになる。このようにして記号の意味が記号それ自身の体系によって基礎づけられることが可能になるとされる。したがって言語とは、相互に説明し説明される関係にある連続した慣習系によって成り立つ自己分類体系だということができる。

一般化すれば、記号とは、「何か（解釈項）が指示しているもの（対象）をそれと同じように指示できるように規定するもの」であり、さらに「今度はその解釈項が記号となるというような過程が無限に繰り返される」一種の迷宮のようなものである。このように記号の定義の中に「無限の記号現象の過程」が含まれることに注意すべきであろう。表象の対象とは初めの表象の解釈項であるような表象のことに他ならない。しかし、こうした表象から別の表象へと受け継がれる無限の系列もどこまでも続くわけではなく、「習慣」と呼ぶ絶対的な対象を最終的な解釈項とするとパースは言う。

この最後の解釈項は記号だろうか？ エーコはこれを記号ではなく、記号を結びつけ、互いに関連させる意味分野の総体であり、構造そのものであるとした。しかし、それはどのようにして可能なのだろうか。この問いに対する確たる答えはラカンの精神分析的記号論をまつほかない。

9. 1. 4 エーコの記号論—記号システムから生成過程へ

これまで見てきたように、記号（学）論には、ソシュールとパース（Peirce, C.S.）を起源とする二つの流れがある。イェルムスレウら、ソシュールの記号学に属する立場と、モリス、オグデン、シービオクラパースの記号論に属する立場とに分けられる。エーコ（Eco, U.）は、これら二つの流れにまたがる立場を取っていると見られるが、「すでに成立している社会的慣習に基づいて

何か他のものの代りをするものと解しうるすべてのもの」という記号の定義からして、パースの説により近い位置にいると考えられる。

ここ 10 年位の間に、記号論には理論的な転換が見られたという。記号システムの分類という静的な分析から離れ、記号や意味が生成される形態や、システムとコードが社会的営みの中でいかに使われ、いかにその枠を越えていくかという方法の探求へと向かっているように思われる。以前はメッセージを生成する記号システム（言語、文学、映画、建築、音楽等々）の研究が主流であったが、今はそれを介してなされる作用が主に検討されている。それはコードを構成し、変える行為であるが、同時にコードを用いてその行為をなす個人を構成し、変化させていくことでもある。したがって記号過程の主体は個人であるということになる。

パースの記号論の概念だった「記号過程」という用語は、エーコによって、ある文化が記号を作り、記号に意味を付与する過程を指すための概念に拡張された。エーコにとっては、記号過程は社会的活動であるが、記号過程という個人的活動に主観的要因が含まれることを認めるところは新たな時代への幕開けを予感させる。つまり、この見解は、ポスト構造主義的な記号理論の二つの流れに沿ったものとなっているのである。その一つは意味作用の主体的側面に焦点をあてたものであり、意味は主体の作用として解釈される（主体は記号表現の作用である）とするラカンの精神分析的アプローチに代表される見方であり、他の一つは意味作用、つまり個人間のコミュニケーションにおけるその実際の、倫理的、イデオロギー的利用の社会的側面に重点をおいた記号論である。そこでは、意味は文化的に共有されたコードを通して生産される意味論価値として解釈される (de Lauretis, 1984)。しかし、エーコはそうした方向性を見据えながらも、飽くまで記号論の方法論的立場を貫く姿勢を崩さず、主体の問題は記号論を超えたところにあるとした。

9. 2 構造からコミュニケーションへ

9. 2. 1 コミュニケーションにおける主体の復権

構造主義の影響が様々な社会科学、人文科学の諸領域に大きな影響を及ぼすようになった反面、慣習とシステムの構造主義的二分法は結果から過程を、構造から主体を切り離す点において、その硬直性に対する批判も見られるようになってきた (Coward & Ellis, 1977)。慣習より構造を重視する構造主義の考え方では、構造そのものの変化を説明できないとして、1920 年代後半、ヴォロシーノフ (Volosinov) とバフチンは、ソシユールの共時的見方と言語システムの構造を強調する考え方に対して次のような批判を行った。ヴォロシーノフは、ソシユール流のパロールに対するラングの優位性を逆転して「記号は、組織化された社会的意思交換であり、その外部では存在できず、ただの物理的的人工物に戻ってしまう」(Volosinov, 1973)。記号の意味は、言語システムの他の記号との関係の中だけにあるのではなく、それを使用する社会的文脈の中にこそあるとされる。

また、ソシユールは歴史性を無視したことでも批判されてきた。プラハ学派の言語学者のヤコ

ブソンは、「純粋な共時性は幻想に過ぎない。全ての共時システムは、お互いに分離できないシステムの構造的要素として過去と未来を有している」と言明している。言語は前の世代から受け継いだ静的で閉じた、安定したシステムではなく、常に変化しているシステムとして扱われるべきであるとする立場からは、記号は、「階級闘争の闘技場」であり、「記号システムの社会的な次元は性質と機能にとって本質的であり、システムだけを孤立して研究できるものではない」(Hodge & Kress, 1988)ということになる。

バフチンが導入した「言葉」の概念は、「語」を意味すると同時に「言説 (discours)」を指す用語でもあった。これは、主体によって支持された言語活動であり、また、言語活動の内部で自らを構成する主体の概念でもある。言説、言語行為、発話等々、現代の言語学が取り組むべき問題は、おおよそこの主体の場において精神分析の力を借用しながら、バフチンによって明示されてきた。

それまでの言語学(ソシュール、イエルクス流の)が措定した言語という枠組みは、主体を抽象化したところに成り立つものだった。その時代の詩学は文学テキスト(小説、詩)のような複雑な意味を内包した対象を想定していなかったのである。「言葉」において示される意味は、言説に反映された外的な指示対象の中にあるのではない。他方、言説を発する自己の内部において閉じた主体が意味を独占しているのでもない。言説は複数の分割された「私」が同時に異なる言語審級へと分配されて存在するものである。対話とは、他者の声を複数の「私」が聴くポリフォニーであり、やがて、複数の「私」が互いに自らの声を聞かせ合う関係の中で意味が立ち上がる。とはいえ、意味を固定するための特別な主体があるわけではない。バフチンのいう主体とは、呼びかけの主体であり、ラカン流に言えば欲望の主体ということになる。

バフチンは、このポリフォニーを対象とする学を言語学ではなくメタ言語学であるとする。対話性とは、言葉の中に、その言葉の上に重ねられた別の言葉を見出すことであるとされる。臨床的対話(ナラティブ・セラピー)において語られる「充ちた言葉(ラカン)」というのは、それがポリフォニー的であることを必要条件とする。つまり、真の対話が成立するためには、間テキスト性という開かれた空間がなければならない。

ドストエフスキーのポリフォニー小説における主人公に対する作者の新しい芸術的立場に関するバフチンの議論は、徹底的に推し進められた対話的立場であり、それは主人公の独立性、内的な自由、未完結性と未決定性を承認するものである。作者にとって主人公とは価値ある「他者」、つまりもう一人の完全な権利を持つ他者の「私」なのである。

9. 2. 2 ポリフォニー小説における対話性—バフチンの対話論

バフチンの対話理論が考察の対象にしているのは「他者」であり、「他者の“私”」の問題である。『ドストエフスキーの詩学』において、バフチンは「他者の意識というものは客体として、モノとして観察し、分析し、定義するわけにはゆかない。可能なのはただそれらと対話的に交流す

ることだけである。ポリフォニー小説の作者は、極度に張りつめた大いなる対話的能動性を要求される。それが弱まるやいなや、すぐさま主人公たちは凍りつき、物象化され、小説中にモノローグ的に形式化された生の断片が出現することになる。」と述べる。

ここで言う物象化とは「人格としての人間を貶め」、人間の能動性を「死せるモノ、物言わぬ素材に対するものに限定し」「非-意味的な論拠によって他者の声を完結させる」こととされる。しかし本来、「人格は客体的認識に服さず自由に対話的に“私”にとっての“他者”として開示されるべきものだ」とバフチンは言う。人格はただ対話という形式を通じてのみ“他者”として示されるものであり、また、そこにおいてのみその独立性や内的な自由が承認されるものなのである。

実証主義科学というものは知識のモノローグ形態であり、知性がモノを観察し、それについて意見を述べるスタイルの科学である。そこにはただ一人の主体、観察者、語り手しか存在しない。その対象とされるのは声なきモノのみである。認識の客体はどのようなものであれ（人間も含めて）、モノとして知覚され認識され得る。だが主体それ自体は、モノとして知覚され研究され得るものではない。なぜなら「主体としての」主体が主体でありながら「声なきもの」になることはできないからである。したがって、その認識は対話的でしかあり得ない。

『ドストエフスキー論の改稿に寄せて』の中に、次のような記述を見ることができる。人間の形象に対する作者の基本的な立場は、外在性への批判であり(見附, 2009), 内的人格を云々することへの抑制である。ポリフォニー小説における作者の新しい対話的立場は、内的および外的な外在性の包括的な視座によって保証される。

見附(2009)によれば、モノローグ的の外在性とポリフォニー的(ダイアログ的)の外在性には根本的な違いがあると言う。「外在性」という理念は、バフチンの初期から後期にかけて一貫して用いられたものであるが、初期には、「行為の哲学に寄せて」で展開された存在論的な「相互的な外在性」とでも呼ぶべき意味と、「美的活動における作者と主人公」で美学上の理念として提起された「モノローグ的の外在性」とでも呼ぶべき意味との二つの意味合いを有していたとされる。バフチンは後に、初期美学における「外在性」をモノローグ的なものとみなし、ドストエフスキーの作者としての立場のなかに新しい「外在性」、つまり「ポリフォニー的(ダイアログ的)の外在性」を見出したと言う。これがバフチンの小説論におけるモノローグからダイアログへのアクセントの移動である。この「ポリフォニー的(ダイアログ的)の外在性」という理念は、「美的活動における作者と主人公」における美学的な理念ではなく、「行為の哲学によせて」における存在論的な理念(「相互的な外在性」)を発展させたものと見られる。つまり、「超越的」立場からの「完結」ではなく「関与」の理念の方が受け継がれたと見るべきであろう。初期美学において、存在を超越し、あたかも神のような位置にいた作者は、ポリフォニー小説においては、主人公に対して対話的に応答することで作品の中の対話に関与する一参加者となるのである。

9. 2. 3 トルストイとドストエフスキーの作品における作者の位置

次に、作者の位置に関する具体例を引用して示す。

「人々が死ぬとき、トルストイの関心を引くのは死それ自体ではない。死が彼の関心を引くのは、生全体の結論として、最終的な特徴づけとしてである。死は危機を解決することはない。死は人生の伝記的な諸々の点（誕生、幼年時代、少年時代、青春、結婚、子供、死）を終わらせるか、あるいは中断する。（中略）ここで言われているのは、超越的な外在性の立場から死を含めた人生というものを捉えるか、それともそうではなく、死を知らない生の出来事へと参与するかという違いであると思われる。（中略）それぞれに閉ざされた世界を持つ三者（トルストイ『三つの死』における裕福な地主貴族婦人、御者、樹木の三者）は、それらを包含する作者の単一の視野と意識の内において統合され、比較対照され、相互に意味づけられている。この作者こそが、彼らについてすべてを知り、三つの生と三つの死のすべてを比較し、対決させ、評価しているのだ。三つの生と死すべてが互いを照らし合うのはただ作者のみのためであり、その作者は、彼らの外に立ち、彼らを最終的に意味づけ、完結するために自らの外在性を利用しているのである。登場人物たちの視野に比べて、作者の包括的な視野は、巨大な原理的な余剰を持っている。」

ここでトルストイの場合、個々の登場人物の生と死を完結する全体的な意味は、作者の視野の中においてのみ解明されるのであり、ひとえに登場人物の一人ひとりに対する作者の視野の余剰のおかげで、つまり登場人物自身は見ることでも理解することもできないということのおかげでそれは可能なのだ、とされる。このモノロギックな外在性は、作者のみが利用できるものとして描かれている。したがって、トルストイのこの短編は、多次元的であるにもかかわらず、ポリフォニーも対位法を含んでいないとバフチンは判断するのである。

もしドストエフスキーがこの短編を書いたならばという仮定の上でバフチンは次のように述べる。ドストエフスキーは「作者である彼自身が見て知っている重要な事柄を全部、主人公たちに見せ、認識させたであろう。そして自分のためには本質的な作者の余剰をまったく残さなかっただろう。彼は地主貴族夫人の真実と御者の真実とを顔と顔が向き合う形に引き寄せ、両者を対話的に関わらせるだろう。そして彼自身も両者に対して対等な対話的な立場を取ることであろう。作品は大きな対話として構成され、作者はその対話の組織者かつ参加者として登場し、自分に最後の言葉を留保することはしないであろう」。

これが「ドストエフスキーのポリフォニー小説における、主人公に対する作者の新しい立場」である。

9. 3 質的研究法における視座—人文科学としての心理学に向けて

9. 3. 1 人文科学への対話的アプローチ

「外在性」という存在論的な前提は小説論だけではなく、バフチンの対話理論全体における前提

でもある(見附, 2009)。人文科学とは、いわば人格としての人間(とその所産)に対して人間が構成する学問である。そこにあるのは人格と人格との関係であって、認識主体と声なきモノとの関係ではない。したがって、バフチンにとって、人文科学は人格に対するものとして対話的活動によって構成されるべきものなのである。構造主義についてバフチンが、「構造主義にはただ一つの主体、研究者自身の主体しかいない」と言う意味は、人文科学であるはずの構造主義がモノを対象にするかのようなモノローグ的な態度を取っている点を指すと思われる。

異質な文化のよりよい理解のためには、自己を忘れて、その文化の中へ移住し、その異質な文化の目で世界を見ることが必要だという考え方がある(見附, 2009)。創造的な理解をするためには、しかし、時間における自己の位置、自己の文化を放棄するべきではないと言う。理解にとって重要なことは、理解する者の外在性、時間における、空間における、文化における外在性であり、研究者が創造的に理解したいと思うものに対する外在性であるとされる。

文化の領域においては、外在性は最も力強い理解の推進力である。異質な文化は他者の文化からみたときにこそ、余すところなく、深く自己を開示するものである。他者の異質な意味に出会い触れ合うことで、一つの意味はそれ自身の深淵を開示するのである。そのような二つの文化の対話的な出会いのもとでは、それらは一体になることも混じり合うこともなく、どちらも自身の統一と開かれた一体性を保ちながら、互いに豊かにされる可能性が開かれる。バフチンが言うポリフォニーとしての対話とは、このように出会う者同士が互に、自己の独立性を維持し外在性を保ちながら対話的に関係し合うことを言うのではないだろうか。それによって、われわれ自身が見ることのなかった自身の新しい側面をその関係の中で知ることさえできると考えられる。

この異質な文化を質的研究のフィールドと置き換えれば、ポリフォニー的(ダイアログ的)外在性によるアプローチが、ある一者(研究者)の超越的な外在ではなく、それぞれが唯一の現存在として存在に関与する自立した者たちの相互的な外在に由来する対話が質的研究に豊かさをもたらすという理解の方向が見えてくる。

9. 3. 2 ポリフォニーとしての対話

バフチンが導入した「言葉」の概念は、「語」を意味すると同時に「言説(discours)」を指す用語でもあった。これは、主体によって支持された言語活動であり、また、言語活動の内部で自らを構成する主体の概念でもある。言説、言語行為、発話等々、現代の言語学が取り組むべき問題は、おおよそこの主体の場において精神分析の力を借用しながら、バフチンによって明示されてきた。

それまでの言語学(ソシュール流の)が措定した言語(lang)という枠組みは、主体を抽象化したものでしかなかった。その時代の詩学は文学テキスト(小説、詩)のような複雑な意味を内包した対象には無力だった。「言葉」において示される意味は、言説に反映された外的な指示対象の中にあるのではない。他方、言説を発する自己の内部において閉じた主体が意味を独占している

のでもない。

言説は複数の分割された「私」が同時に異なる言語審級へと分配されて存在する。対話とは、他者の声を複数の「私」が聴くポリフォニーであり、やがて、複数の私が互いに自らの声を聞かせあう関係の中で意味が立ち上がる。とはいえ、意味を固定するための固定した主体があるわけではない。バフチンのいう主体とは、呼びかけの主体であり、ラカン流に言えば欲望の主体ということになる。

バフチンは、このポリフォニーを対象とする学を言語学ではなく、メタ言語学であるとする。対話性とは、言葉の中に、その言葉の上に重ねられた別の言葉を見出すことである。臨床的対話(ナラティブ・セラピー)において語られる「充ちた言葉(ラカン)」というのは、それがポリフォニーであることを必要条件とする。つまり、真の対話が成立するためには、間テクスト性という開かれた空間がなければならない。

9. 3. 3 「ドストエフスキー」をテクストとして

ドストエフスキーの作品における言説のコンテクスト、すなわち間テクスト性は、「私」が無数の面に拡散する複数化によって保障されている。伝統的な詩学に対して、バフチンは言語学ではなく、心理学的視点による対話を第一ステップとしてかの作品群を分析する新たな詩学を構想した。第一ステップと述べたのは、結局、心理学の視点はそのまま維持されず、捨て去られるからである。対話の内在的原理として「私」を指定する段階まではまさしく心理学的視点を援用していると言える。しかし、それはすぐに解体され、言葉の審級として主体を探りながら、やがて、そうした話す主体としての「私」が存在しないことが示される。これはもはや心理学ですらない。

言葉の様々な審級の間の衝突、言説間の対立、はポリフォニーの集合として現れ、決して単一の意味や主体という形に収束しない。このことをバフチンは「夢の論理」という卓越した呼び名で表現する。それは、上下、善悪、正誤、聖俗、信仰と背教といった矛盾する対立項を共存させて維持する論理である。ドストエフスキーの作品においては、作者の言説も主人公の言説も、他の登場人物の言説に対して超越的な位置をもたず、同じ地平において「ともにある」言説の一つに過ぎない。二つの言説の衝突を調整し統合するような第三者は存在しない。あたかもフロイトが無意識と夢において発見した非合理的で矛盾に満ちた論理の存在をバフチンは「夢の論理」として、独自に発見したように見える。

9. 3. 4 質的研究法の創発性

バフチンの独創性は、歴史主義批判や言説審級の多声的分析のような大文字の(理論的)方法論にまつわるものばかりではない。ドストエフスキーの作品(テクスト)から影響を受けつつバフチンが行ったのは、そうした学的方法論のレベルだけでなく、ドストエフスキーによって開かれた現代文学のもつ現実的な力そのものの発見だった。問題の発見が先か方法論の確立が先かは

それほど問題ではないだろう。たぶん、それらは相互に（それこそ多声的に）作用し合った結果であるだろうから。

バフチンを学ぶことは、ポリフォニー詩学の何たるかを学習することだけが目的ではないはずである。質的研究法のもつ豊かな発想の泉に身を養（ひた）すことで、新たな芸術のリアリティに耳を澄ますことが可能となるかもしれない。